

特 252

414

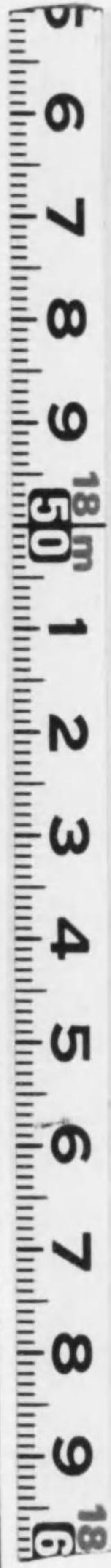
大學
教授 松岡孝兒 著

戦争はこれからだ

日本は伸びつつある

10 せん

今日の問題社發行



始



146

特252
414



京都帝國大學
助教授 松岡孝兒 著

戦争はこれからだ

今日の問題社發行



目次

- 一、更に緊張……………(一)
- 二、現代戦は複雑微妙……………(四)
- 三、對支問題は對ソ問題の前哨戦……………(10)
- 四、ソ聯の腹……………(17)
- 五、消費節約等は何の爲か……………(20)
- 六、日本の国力は決して減退しない……………(25)
- 七、自覺と感激による實踐が肝要……………(31)
- 八、國民の一人一人が戦士……………(35)
- 九、戦ひはこれからだ……………(39)

戦争はこれからだ

京都帝國大學
助教 授

松岡孝兒

一、更に緊張

畏くも 天皇陛下より支那事變一周年に際し、優渥なる 勅語を賜り總理大臣は此の宏遠なる 聖旨を汎く國民に傳達する爲内閣告諭を發した。

勅語

今次事變ノ勃發以來茲ニ一年朕ガ勇武ナル將兵果敢力闘戦局其ノ歩ヲ進メ朕ガ忠良ナル臣民協心戮力銃後其ノ備ヲ固クセルハ朕ノ深ク嘉尙スル所ナリ

惟フニ今ニシテ積年ノ禍根ヲ斷ツニ非ズムバ東亞ノ安定永久ニ得テ望ムベカラズ日支ノ提攜ヲ堅クシ以テ共榮ノ實ヲ舉グルハ是レ洵ニ世界平和ノ確立ニ寄與スル所以ナリ

官民愈々其ノ本分ヲ盡シ艱難を排シ困苦ニ堪ヘ益々國家ノ總力ヲ舉ゲテ此ノ世局ニ處シ速ニ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ期セヨ

内閣告諭

本日支那事變勃發一周年ニ當リ 聖慮宏遠圖ラズモ優渥ナル 勅語ヲ拜ス洵ニ恐懼感激ノ至ニ堪ヘザルナリ

恭シク惟フニ抗日容共政權ノ潰滅ヲ圖リテ日支ノ提攜ヲ堅クスルハ即チ東亞ノ安定ヲ確保シ延イテ世界ノ平和ニ寄與スル所以ノ道ナリ

事變ノ前途ハ尙遠遠ナリ此ノ時ニ當リ朝野一體堅忍持久ノ態勢ヲ整ヘ凡百ノ施策ハ國家ノ總力ヲ舉ゲテ事變ノ目的ヲ達成スルニ集中シ盡忠報國ノ一念以テ萬難ヲ排シ 聖慮ニ應ヘ奉ラムコトヲ期セザルベカラズ是レ本大臣ノ切ニ全國民ニ望ム所ナリ

内閣總理大臣 公爵 近衛 文 麿

非常時局に直面しある皇國臣民たる者、この 聖旨を拜し、更に、一段と緊張し、積年の禍根を斷ち盡す迄は、斷乎として勇往邁進、以て 聖慮に應へ奉らむ事を誓はぬ者は一人もあるまい。

聖旨は昭々乎として明かである。國民は、只如何なる難關をも、突破して進む堅き決意と團結とを以て、國の凡ゆる力を、聖戰目的の達成に向けなくてはならない。これが爲には、時局認識を、更に深むる必要がある。

二、現代戦は複雑微妙

現代の戦争に於て、勝を千里の外に決するには、内に國力の充實がなくてはならぬ。

現代の戦争が、國家總力戦といはれるのは、この意味である。

武力戦のみではなく、經濟戦、思想戦、言ひ換へれば、物のたたかひ、心のたたかひ等、すべてに勝たなければ、戦勝全般の榮冠を、獲

ることは出来ないのである。

これは、現代の戦争は、過去の戦争と、その規模に於て、比較にならぬほど大きく、同時に深刻複雑なる國際關係、社會情勢が伴つて、戦争を單なる武力の勝敗を以て、一舉に決することが至難となつてゐるからである。

今日のわれわれが、當面してゐる支那事變に於ても、この事を、はつきり見る事が出来る。

事變勃發以來、一年の今日、有史以來、未曾有の大軍は、大陸に聖戰の旗を進め、陸、海、空の三軍は、戦へば必ず勝ち、攻むれば、必ず落し、稜威の下、赫々の武勳を揚げ、既に首都を攻略し、敵の誇る防塞は、悉く突破して、敵を殆んど、潰滅に瀕せしめてゐるのであ

るが、抗日政權は依然として、なほ長期抵抗を呼號し、全面的屈服に到つてはゐない。むしろ、たたかひは、これからだと、いはれるほどなのである。

かくの如く、戦闘そのものは、明白なる壓倒的勝利を、續けてゐるに拘はらず、戦争は決して、終極には至つてゐない。ここに、現代戦の複雑微妙な關係がある。

もともと、わが國は排日抗日權力の潰滅を、期して居るのであつて支那の全部を敵として、戦争して居るのではない。

従つて、事變一周年を迎へた今日も、尙宣戰布告はしてゐない。要は東亞安定の爲め、積年の禍根を、艾除すればよいのである。

併し乍ら、此の積年の禍根、言葉は極めて、簡單であるが、仔細に

凝視て見ると、極めて複雑なものがある。それは列國の對支關係である。

支那に於ける利權と、投資で、世界第一と稱せられたイギリスは、支那を以て世界の植民地たらしめようと、老獪に立ち働き、而も利害に敏感で、わが國の對支發展に、好感を持たないのみか、支那の排外思想を利用して、排日侮日を煽動し、遂に、本事變に迄、導いたと云つてよい位である。

そして、事變以來、蔣政權に倒れられては、大事な利權も、投資も、ファイになりはせぬかとの懸念及び日本の東亞支配を惧るゝ結果、精神的に、物質的に、極力之を支援してゐる。

然し、わが連戰連勝と、支那新政權の發展と云ふ様な、着々進む事

實の前には、如何ともしがたく、盛んに米、佛等を誘つて、共同干渉を策しても見たが、結果はいつも成功せず、目下打開作に窮しながらも尙望みは捨てず、出来得れば、此の事變を外交戦に導いて、勝利を得ようと、焦つてゐる様である。われわれは、決して、此の手に乗つてはならないのである。

アメリカは、政府としては、事變勃發以來、中立的態度を持してゐるが、支那に對する世界第一の輸出國であるといふ利害關係と、國民の輿論とに動かされて、時に消長はあるが、大體に於て、支那側に同情的である。

事變以來、わが軍事行動を以て、九國條約乃至は、不戰條約違反であると叫んで、對日壓迫に、協力しようとした事もあつた。現在の處では、過度に事件に深入りする事は、豫想されないが、然し、油斷は出来ない。

フランスは、わが友邦ドイツと、仇敵の間柄にある事と、ソ聯と同盟を結んでゐる關係から、わが國に對しては、萬事非友誼的行動を、執つてゐる。事變以來、對支武器輸出、軍事顧問の派遣等、物心兩方面の援助も、相當なされてゐる。

支那沿岸が、わが海軍によつて、封鎖されてゐる今日、印度支那よりする、武器の對支輸出は、支那としては、最後に残る唯一の後方連絡線であり、それだけに我國としては、特に嚴重監視の必要がある。そして其の對外政策は殆んどイギリス追隨である。

以上の三國に、ソ聯を加へた四ヶ國の動きが、今次事變の裏面に、

大きな作用をなしてゐるのである。ソ聯に就ては後述する。

斯かる中に、只我が意を強うするに足るものは、防共精神に於て、完全に一致し、堅く結ばれた友邦ドイツ、イタリーの存在する事である。

兩國は、事變以來、わが國に全幅の好意を寄せ、或は世界第二位と稱せらるゝ、對支貿易の經濟的利益を放棄し、或は對支武器禁輸、軍事顧問、飛行將校の引上を勵行して忠實に協定精神を發揮してゐる。此の事は、わが國民の忘れてはならぬ事である。

三、對支問題は對ソ問題の前哨戰

これを、具體的に云へば、今日の事變は、支那の抗日政府が、わが

國に挑戦したのであるが、その背後には、これを援ける國々があつてそれを恃みに、抗日政府は、益々氣負つてゐるのである。

其の最も甚しいのは、ソ聯邦である。ソ聯は事變以來、支那に對し精神的に、或は物質的に、夥しい援助をしてゐる。武器、軍需品の供給、ソ支不可侵條約の發表、支那軍へ幹部や飛行士の派遣等、枚舉に遑がない程であるが、それが、日を経るにつれて、だんだん露骨になつて、ソ聯製の、例のE十五型、E十六型といふような飛行機には、赤軍の飛行士が乗つて、わが軍と空中戦をやる有様であり、最近では多くの赤軍將校が、蔣介石の幕僚となる爲に、目下モスコウから急行してゐる模様である。

更に、延安にある共産黨の大學へは、スペイン戦線で、充分實戰の

經驗を経た、優秀な赤軍將校が、支那共産黨員や、大學生に抗日赤化戦術、バルチザン戦法を教へる目的で、やつてくる筈で、既にモスコ―を出發してゐると、傳へられてゐる。

斯かる有様をみれば、わが國が、今戦つてゐるのは、支那抗日軍のみではなく、その後押しをしてゐるソ聯邦とも、或意味では、既に、戦端を開始してゐるといふても、差支へない。

即ち、今次事變は日ソ戦争の前哨戦であるとも云へる。然らば、何故に、ソ聯邦が支那抗日軍を、こんなに援けるのであらうか。

それには、重大なる理由がある。

御承知の通り、ソ聯邦は共産主義を建國の精神として、これを全世界に擴めて、世界を共産赤化しようとするのが、國是である。

その目的で、歐洲へ働きかけたが、諸國が、その策動を、警戒し始めたため、對歐赤化が、困難となつた。

そこで、宣傳中心をアジアに移し、先づ東洋諸國を赤化して、歐洲經濟の培養機關とも云ふべき、東洋の地盤を顛覆して、間接的に、歐洲諸國に、痛撃を與へようとした。

そして、東洋諸國中、最も望を囑したのは、支那である。外蒙古は既に赤化せられ、新疆も亦、赤化侵略せられてゐる。

茲で、寸時、ソ聯が、どんな風に、支那を赤化し、それが日本へ、どんな影響したかを述べて見やう。

國民黨の起つた當初の支那は、國民主義運動とか、反帝運動が相當熾であつて、コミンテルンの喰ひ入るに最も都合のよい時であつた。

一九二三年の孫文、ヨッフエの共同宣言は、御互に相手を利用する考へてなされたのであるが、翌年國共合作が、正式に決定した。そしてボロチンは、國民黨最高顧問として、ブリュツヘル（現ソ聯極東軍司令官）は最古參の軍事教官として、愈々本格的赤化工作に入つたのである。

一九二六年の秋、支那の革命運動は、急に進展し、南支から中央に推し擴められ、蔣介石の北伐運動は、展開せられた。此の北伐戦にあつては、ソ聯の軍事教官が、蔣介石の軍隊に、近代戦術の基礎を築き軍隊の改造もしたものであつた。

ところが、この北伐が半ば成功し、國民革命軍が、長江一帯を確保すると、果然、蔣介石の權威が増大し同時に反共を実施しはじめた。

利用しようと思つた共產黨は、利用された形になつたので、氣が氣でなく、遂に葉挺、賀龍、朱德を買収して、共產軍なるものを組織し、一九二八年頃には、朱毛軍の名を以て、世界的に知られる様になつた。

斯うして、國共は分離したが、共產軍は次第に増大し、その遊撃戦争によつて、所々にソヴェエト區域を簇生せしめ、其の全盛期には、兵力三十萬にも及んだ。

爾後民衆を獲得し、排日運動を指導し始めた。そして數限りなく行はれた排日運動の蔭には、常にコミンテルンの魔手が動いてゐたのである。

今から四年前、中國共產黨は、所謂八・一抗日救國宣言を發して、

支那の抗日運動に、油を注いだので、抗日團體「抗日救國大同盟」を皮切りに、各種の反日組織が、陸續として産れ、終に、一昨年六月迄には、コミンテルン及び中國共產黨の期待する様な、抗日人民戦線が完成したのである。

即ち、昨年の蘆溝橋事件は、上述の様に、過去十數年間培はれた支那の排日、侮日、抗日思想の爛熟の極發したものである。そして、國共は又結び付いた。ソ聯の支那援助の理由は、此處にあるのである。即ち、ソ聯邦から見れば、時機は多少早かつたかも知れないが、何時か一度は、やらうと計畫してゐたものが起つたので、逸すべからざる機會である。

そこで、さあ、日本をやつつけるのは今だ、いくらでも援助するか

ら頑張れ、日本は武力こそ強いが、國內の資源は少いし、經濟力も大したことはない。少し位戦鬪で負けても、頑張つてゐれば最後の勝利は、支那のものだと、熾んに煽て上げ、且つソ支不侵略條約を發表した外、本年三月迄に内輪に見積つて、合計八百三十四機の飛行機を送り、戦車三百五十臺、其他援助した兵器は夥しい數に上つてゐる。

四、ソ聯の腹

ところが、ソ聯邦の腹の中には、もう一步進めた計畫を、立てゝゐるのである。

支那を煽てゝ、日本と戦はせ、それを長期に導けば、日支兩方の力が弱る。そうなれば、支那の赤化には、愈々好都合であり、一方日本

の戦力低下を狙つて、ガンと一撃すれば、必ずまゐるに違ひないと考へ、なるべく、戦争を長びかせてをくに限ると、凡ゆる手段を講ずると共に、極東に於ける軍備の拡大には、特に力を注ぎ、三十萬の兵力二千臺近くの飛行機、戦車を準備し、且つ有時に際し、歐露の援助を俟つ事なく、何時でも戦闘し得る様、重工業中心の東漸に努めてゐる。

吾々が、此の點を、しつかり見極めるならば、南京が落ちても、徐州が潰滅しても、瀕死の支那抗日軍が、屈服しないどころか、あだかも、豫定の退却の如く装つて、強がりと言つてゐるわけが解るのである。

元來、この事變の目的は、日、滿、支三國の親善提携を以て、東亞

永遠の平和を確立し、世界平和に寄與するのが、眼目である。

この大目的を達成する爲に、抗日政權を、潰滅せしめて、新しい秩序の下に、東亞平和を、確立するべく、皇師は堂々の歩武を進めてゐるわけである。

従つて、聖戰目的達成の爲に、先づ抗日蔣政權及び抗日勢力を潰滅せしめなければならぬ。此の事は、わが不擴大方針放擲の瞬間から、堅持せられてゐる斷乎不拔の決意である。而もそれのみで、足れりと云ふことは出來ない。東亞を赤化し、東亞永遠の平和を紊す、腹黒い敵のその赤い手を絶ちきらなくては、眞の目的達成とはいひ得ないのである。

この意味から言つて、事變の前途は、未だ遼遠であり、たたかひは

これからだといふことを、何人も否定することは出来ないのである。

五、消費節約等は何の爲か

ここに於て、今後來たるべき、事態に對しての覺悟と、準備が緊要であることは、云ふまでもない。

今日、對支那事變の爲に、爲されるわが國の準備と覺悟とは、單に支那抗日軍潰滅の爲にのみ、爲されてゐるのではなく、諸外國に對し我に絶対に容喙を爲さしめないだけの國力を保持するものでなくては意義を爲さないのである。

この點に於ての、國民一部の覺悟は、未だ充分と言ひ得ないものがありはしないか。

政府は今日、あらゆる方策を以て、國家總力の培養につとめ、戰爭遂行と、新支那建設に必要な物資の供給を、確保すべく、物資の節約に、生産の増加に、貯蓄の勵行に、輸出の増進に、國民全般の協力を求めてゐるのであるが、その意味を、或は今日のわが國力が、支那事變の爲に、減退したからと、解してゐる向がないでもないが、これは大なる認識不足であることを、知らねばならない。

今日のわが國力は、決して減退してゐるのではなく、むしろ増強されつゝある状態であると、云つていゝのである。

先般、日本に亡命して來たソ聯の極東ゲ・ベ・ウ長官リュシコフ大將の手記の中に、日本の一印象として「支那事變中と云ふのに、一般の生活状態に、何等平時状態と變りないことが、始めて日本に來た新

鮮な私の目に、直ぐ映じたことと、ソ聯邦の各新聞は、しきりと日本の經濟狀態が、逼迫してゐるとか、生産品や商品の値段が、恐ろしく高いとか、これ等が市場から、段々姿を消して行くとか、書いてゐるにも拘らず、事實は食糧品やその他の商品が豊富で、しかも値段が安いことである。」と書いてゐるが、此の事は獨り、リュシコフ大將ばかりでなく、各國から來る視察者も、觀光客も皆驚きの眼をみはる所である。

眞に、歐洲大戰當時のドイツ、イギリス、フランス、イタリー等の狀態を見聞した者に取つては、驚異であるに違ひない。當時、最も大きい苦痛を嘗めた獨逸では、まづ、最初に起つた問題は、人員の不足であつた。

多くの男子が、出征した結果、婦人の勞働が要求さるゝ様になり、短期間の訓練を授けられた婦人勞働者が、續々と職場に送り出され、戦争第二年目には、軍需品製造に、従事してゐる者のみでも、百萬に達し、電車の運轉手、車掌は全部婦人がなり、鐵道従業員では、十三萬人の婦人が男子に代つたのである。

そして人の問題の次に起つたのは、物資の缺乏である。輸入が十分出來ぬ上に、平時なら有る所から無い所へ、運ぶ事も容易であるが、交通機關が軍の輸送に充てらるゝ爲、物資の配給が圓滑を缺き、缺乏は國民の糧食に迄及んで來たのである。

斯くして、切符制度が採用され、後には切符を持つて、配給所へ行くつても、自分の番が來る頃には、肉もパンも貰へないと云ふ狀態に迄

なつた。

而も一方献納が盛に行はれ、金屬は固より、白い布類は、悉く繙帯にする爲戦線に送り、其の上、尨大な戦費の爲、軍事公債の募集が半強制的に行はれた。然し、誰れも皆祖國の難に赴く意味で、進んで政府の意圖に、合する様に努力したのである。

こんなのに比較すると、現在の如く戦ひつゝ伸び、伸びつゝ戦つてゐるわが國の情態は、誠に明朗そのものと、云はねばならない。然らば、何が故に、物資の節約、貯蓄の勵行等の積極的實踐を要望されるのか、其の理由を端的に言へば、實に不急の用を節して、以て生ずる國力の餘裕を戦争の爲のみならず、之を將來の東亞經營の資に、充てんが爲に他ならないのである。

尙ほわが國は、食糧資源に恵まれてゐて、此點に於ては長期戦に對する一大強味であり、大戦中の獨逸の窮狀とは、比較にならぬものであることを附言したい。

六、日本の國力は決して減退しない

周知の通り、わが國が明治以來、數次の對外紛争に捲き込まれたとき、必ずしも、常に國力の餘裕は、これに堪ふるに懸念なしとは云ひ得なかつた。それにも拘らず、わが國民は、何れの場合にも、克くこれに堪へ、政府の嚮導するところに従ひ、艱難を排して、却つて國力の飛躍増進を來すを得しめたのである。

これに思を致すならば、實に、今次の事變こそ、われ等國民に與へ

られた、今ひとたびの大試練であると云はねばならぬ。

わが日本國力の、最近の發展に就いては、誠に目醒しいものがある。今、其の實際を、日本經濟が有つ生産力の方面と、其の生産力を決定する諸要素の方面とに分けて、説明して見よう。

先づ第一に、生産力の問題であるが、此の生産力を表現する生産總額は、昭和六年滿洲事變當時は、八十四億三千萬圓であつたが、昭和八年には、早くも百億圓を超過すること二十三億圓、爾後逐年の激増は、昭和十二年に於て、二百四十億圓と推定されるに至つてゐる。

即ち、増加割合から見ると、昭和六年に對して約三倍、昭和八年に對して、約二倍に當つてゐるのである。

この増加には、勿論幾分かの價格騰貴が作用してゐるが、何と云つ

ても、生産量の著増それ自體は、素晴らしいと云つてよい。この傾向は、生産設備の擴張と、物資配給の改善とを通じて、今後益々促進されなければならない。

此の生産力の増加は、また同時に、國民所得の増加に反映してゐる。そして、またさうした國民所得の増加に伴ひ、國民貯蓄も亦、比例して逐年増加を示してゐるし、さうしたものを、地盤として現はれる事業計畫資本も亦、相伴つて増加してゐる。

特に、昨年は時局下の影響を受けること甚しく、昭和八年に較べると、國民貯蓄に就いて云つても、また計畫資本に就いて云つても、統計數字は三倍増を語つてゐる。時局經濟の赴くところ、國民は益々かかる方面への關心を、深めなければならぬが、更にまたこの間、景

氣に浴する人々は、一層自肅自戒、以て經濟報國の國策に副はなければならぬ。

次は、此の生産力を決定する諸要素、即ち勞働力、資金、物資の問題である。

先づ第一には、勞働力の問題であるが、此の勞働力の源泉である日本の人口が、相當に多いといふことは、生産力決定要素として、頗る頼もしいものと、云はなければならぬ。

昭和五年の調査に依ると、日本内地だけで、有業人口は略々三千萬人に達し、内譯では工業人口五百七十萬人に及んでゐる。

従つて、一般勞働力の問題については、何等の不安もない。この傾向は、昭和五年後も大體同様と見て差支へない。唯戰時體制下に入つ

て勞働力の供給、例へば、熟練工の不足等の問題を生じてゐるが、これが對策も、著々實施されてゐるから、近く有效な解決が見出されやう。

資金側の事情に就いても、不安はない。最近の各種拂込金額を見ると、昭和四年の十六億圓から、昭和十一年の六十七億五千萬圓に増加して居り、之を社債及株式のみに就いて見るも、前述期間に十二億六千萬圓から、十九億一千萬圓に増加してゐる。

如何にその増加の状態が、顯著であるかを、容易に認めることができる。固より、右の數字には海外投資及び公債投資を含んでゐるのみならず、借替發行のもの等をも含んで居るから、其の全部が新資本であると斷定は出來ない。

最後に残る問題は、物的資源関係である。此の問題では、日本の食糧が、略ぼ自給自給関係にあることは、最も心強い點である。唯工業原料關係で若干種例へば鐵、石油、非鐵金屬、纖維及ゴム原料等に於ては、海外からの供給に、依らなければならぬものが少くない。

最近、必要な輸入力を確保する爲、輸出の振興、輸入の制限等各種の統制が、考へられてゐるのも、全くかかる事情に依るものであるが尙今後、かかる態勢は、益々強化され、問題の積極的解決は、日本國力の總動員を背景として、追求されねばならぬ。

要するに、日本國力の發展は、歴史的に見ても、また現況より見ても、何等悲觀すべきものを含んでゐない。否寧ろ、逐次強化させられる傾向にあるものと云つていい。

だが、茲に『平和産業の衰退と、之に伴ふ失業問題はどうか』と云ふ反問が或は起るであらう。然し、此の事はいやしくも、國防の充實と東亞經營を遂行しようとするわが國に於ては、好むと好まざるとに拘はらず、わが産業が輕工業から重工業に轉移——即ち産業の再組織——する爲已むを得ない道程であつて、之を避くることを得ないのである。

従つて、前記平和産業の打撃と、之に伴ふ失業問題は、之を、一時的戰時問題の一つと軽く考へて、姑息な對策で片付けてはならぬ。是非共、徹底的方策を講ぜなければならぬのである。

七、自覺と感激による實踐が肝要

前述の如く、わが国力は、向上の一途を辿つて居るのであるが、併し乍ら戦ひはこれからである。前途には、更に重大な事態が横はつてゐる。

われわれは、如何なる長期にも堪へ、如何なる事態にも、打ち勝たねばならない。勝つことによつて、聖戦の意義を生じ、東亞平和の確保が出来るのである。このことを、十分自覺しなくてはならない。

この自覺があつて、始めて、經濟戦、思想戦對策の實踐が、眞に徹底的に行はれるのである。

例へば、節約にしろ、貯蓄にしろ、眞の自覺に基くならば、欣然として、自發的にこれを實踐し、日常生活に於ても、おのづから生活の簡易化が、眞劍に行はれるのである。

だが、茲でわが國の消費節約や、貯蓄の獎勵は、積極的意義のあることを忘れてはならない。之等のことはわが國に於て物資や資金が缺乏せることを意味するものではなく、これによつて得た餘力で、大いに必要なものを購入し、或は必要なものを生産せんとするのである。而もこの消費節約は、米、麥、魚類等の食品には、及んでゐない。美食は何時の場合もいけないが國民は十二分に食つて、大いに體力氣力を養ひ、傍ら質實剛健なる運動により、或は勤勞奉仕、團體訓練等によつて、心身を鍛練することが肝要である。

世界大戰に於て、參戦列強が、主食に窮したのに比すれば、他の物資の節約の如きは、容易なことである筈である。

今日、われわれが、眞に國家總力戦に直面してゐることを、認識す

ればするほど、事態は實に重大なる前途を、控へてゐることを知るの
である。しかも、この重大なる事態を、われわれの時代に解決するこ
とにおのづと感激が湧くのである。此の感激に加ふるに、必ず目的を
達成すると云ふ信念のあるところ、眞に不拔の力が生ずるのであつて
國家總動員の基根は、この點にかゝつてゐるのである。

精神動員、智能動員等、あらゆる動員目的も、すべてこの感激、信
念なくしては達成し得られない。

戦用物資を供給する爲に、あらゆる不便を忍んで、物資を節約し、
戦費調達に遺憾なからしむる爲に、貯蓄を勵行するのも、いかなる苦
難にも耐へて、銃後の護りを完うすると云ふのも、皆この感激、信念
による力から發するのである。

此の力、即ち國民精神の威力こそ、最後の勝利を齎す最大の要素で
あり、國民精神總動員の必要は此處にあるのである。

八、國民の一人一人が戦士

眞に、偉大なるものは、闘ひの中に鍛へられる。強い樅の樹は、嵐
の山中に成長すると云ふ言葉があるが、われわれは、いま闘ひの中に
鍛へ、嵐の中に成長する偉大なるもの、強いものとしての自覺を、忘
れてはならないのである。

一人一人の、自覺による全體の力こそ、創造の歴史を開拓し推進す
るのである。

われわれは、今東亞永遠の平和の創造の爲に、陣痛の苦を嘗めてゐ

るのである。これに耐へる事が、積年の禍根を断つ事である。それによつて支那四億の民衆の平和と幸福とを生み、更に東洋人の東洋を確立するならば、事變は決して、日支兩國にとつて不幸ではなく、むしろ新歴史を展開する上の、避くべからざる段階なのである。

しかも、支那事變は支那抗日軍のみが敵ではなく、これを支援するものも同様であるとする時、この東亞平和創造の道は、眞に未だ容易ならざるものがあると云はねばならぬ。

武力戦は、第一線將兵の忠勇無比なる活躍と、銃後の熱誠なる支援とによつて、偉大なる成果を収めてゐる。

と同様に、前途容易ならざる經濟戦、思想戦も、國民の一致協力により、偉大なる成果を収めなければならぬ。

いま、假りに國民の一致協力が十分でない時の事を考へて見る。

景氣にまかせて、手に入つた金をドシドシ使ひ出したとすると、いきほひ戦争に必要な物を造る代りに、民間の要求するものを造ることになる。ところが實際は、そんなことは出来ないのであるから、結果は物が足りなくなる。足りなくなると、物價が上るのは當然である。物價の上ることは、一般國民生活の不安を來し、延いては、戦地將兵の不安をもたらすのである。

そればかりではなく、伸びつゝ戦ひ、戦ひつゝ伸びる爲に、大切な寶庫である滿洲、支那の資源開發が出來ず、國內生産力の増加も出來なくなるのである。

斯く考へるならば、國民全部が、心を合せて節約、貯蓄をすること

が、物價の高くなることを防ぐ最も近道で、且つ力強い方法であるのみならず、戦に勝つ爲、最も肝要な務である。

今日の經濟戦と云ふのは、あながち、外國との戦ひを、意味するばかりではなく、國內のこうしたことに對して、國民の一人一人が、利己的慾望を克服して、協力實踐することであることを、知るべきである。

蔣政權、並にこれを支援する列國は、わが國の經濟力に對して、疑ひを持つて居り、日本は必ず經濟的に、破れるものと獨斷して、最後の勝利を夢みてゐるのである。

これに對して、わが經濟的實力が、支那事變によつて、決して減退してゐないことを示すことは、とりもなほさず、事變の終局を早むる

ことになり、東亞平和を促進する所以である。

この意味からいつて、國民の一人一人は、經濟戦の戰士であるわけ、各々がその分に應じ、職に應じ、臥薪嘗膽の意氣を以て、邁進すべき任務を有してゐるのである。

九、戦ひは、これからだ

『犠牲なくして創造なし』と云ふが、この偉大なる聖戦に於て、東亞永遠の平和を、創造するには、尊い同胞の血潮はもとより、總ての國民が、物を犠牲にし、心を犠牲にして、始めて目的を達し得るのである。

創造が、偉大なればなるほど、その犠牲も大であることは、勿論で

ある。

有史以來の、大聖戦に進軍するわれ等は、一步も後退することなく戦線銃後打つて一丸となつて、邁進しなくてはならない。敵は諸外國の援助の下に、長期抵抗を豪語して、最後の勝利を妄信してゐる。

『相手は支那だ』と云ふが如き觀念では、到底これに、打ち克つことは出来ない。

われわれは、いま戦つてゐる。そして、われ等はいかなる艱苦をも越えて、新東亞建設の大使命を達成するのである。

この使命を忘れて、難きを煩ひ、安きに就き、同胞血肉の精進努力に反する如き、精神と行爲とを有するものは、祖國に反逆する者と云はねばならぬ。

戦は實にこれからである。

われ等は、眞に今次聖戦の意義を、更に明確に認識し、時局の重大性を、いよいよ自覺して、大和民族の使命と、眞價とを、顯現する信念と感激の下に、舉國一體、益々進撃の歩を進めねばならぬ。

苦しくなつたり、緩みさうになつた時には、第一線に活躍して居る將兵を思ひ出さう。食はぬ事もある。飲まぬ事もある。眠らぬ事もある。

そして、吠え立てる敵火の中へ飛び込んで、笑つて 陛下の萬歳を唱へ乍ら、護國の鬼となり、或は名譽の負傷をする勇士達の活動は、夜となく晝となく續いて居る。

斯くする事こそ上 聖旨に副ひ奉る所以であり、又幾多忠勇なる陣歿

將士の英靈に、應へる所以である事を、忘れてはならない。(終り)

◇編輯後記◇

◇戦ひは正にこれからである。日本が世界の日本として伸びるためには、蔣政権の徹底的撃滅による日本の勝利の確保である。吾々國民は一切を擧げて戦争目的に協力しなければならぬ。「戦争はこれからだ」と一層の覺悟を必要とする。本書は、そのために書かれた必讀の書である。

◇我社は創立以來六年、常に權威と内容のあるパンフレットを發行して、日本で最も信用のあるパンフレットだとの定評を受けて居ります。他に月刊雜誌『今日の問題』旬刊雜誌『情報と解説』を發行し、毎月數點の單行本を出版しつゝあります。

◇最近内容の如何はしいパンフレットや、國策の線に添はぬ小冊子が出てゐますから、賣店で御買求めになる際必ず『今日の問題社版』の表紙の文字に御注意下さい。本社は、どこまでもジャーナリズムの立場から國策遂行に協力せんとする權威と内容と、責任のあるものでなければ發行しないやうにして居ります。

◇發行圖書目錄、月報御入用の方は、本社へハガキで御申込になれば無代にて進呈致します。

戦争はこれからだ

定價 十 錢

昭和十三年九月九日 印刷
昭和十三年九月十二日 發行

著者 松岡孝兒

發行者 伊藤隆文

印刷所 三陽堂 青野印刷所
東京市芝區田村町四丁目二番地

發行所 今日の問題社
東京市芝區田村町四丁目十八番地
電話 芝(43)三〇〇七番
總發 東京五九七四八番

東京鐵道局公認 鐵道保養會 (鐵道各線ホーム)
鐵道弘濟會新聞部 (スタンド一手販賣)

取 扱 店

富田報英堂・川頭春陽堂・啓徳社
東京堂・大阪屋號(滿鮮)
新正堂(京阪神一手扱) 全國鐵道各驛
賣店

イフソロイフ・ブホルトタド
譯 毅 正 上 三 著 共 一 タ ー カ ・ ク ー ボ
二 リ ー ヒ ・ ス マ ー ト

徳富蘇峰先生序

なぜ極東に干渉するか

本書一冊は千人の親善使節に勝る！
日本の全インテリは一読すべき義務がある！

アメリカの讀書界に最も多く讀まれて、
世界の言論界に大きな刺激を與へつゝある
世界に知らるゝ評論家カーターの快著！
列國の極東政策を曝露して、日本聖戦の理
想を確認し、アメリカは東洋から引上げろ
と主張して今日、日本人が言はんとする所
を悉く言つてのけた正論！ これ位面白い
書は他にあるまい！

- 内 容
- ◇なぜアメリカは極東に進出したか
 - ◇門戸開放政策の始まり
 - ◇日本の門戸開放は誰の仕業か
 - ◇支那の崩壊
 - ◇アメリカと極東の關係
 - ◇シベリア遠征
 - ◇九ヶ國條約とは何か
 - ◇戦争の合法化
 - ◇中立か、孤立か、協同か、撤退か

最新刊

全國書店にあり、品切れの節は本社へ！

四六判・二七〇頁・上製
價一圓三十錢（二十錢）

行發社題問の日今

終

誰も戦時に備へませう



國民精神總動員